

＜北海道熊研究会 会報＞ 第70号 2017年 6月 26日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～66号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

北海道野生動物研究所では、2013年以来、東京水産大学出身で、野生動物学者で写真家の稗田一俊氏と共同で、知床ルシャ川・テッパンベツ川両河口域で、熊 U.arctos に関する事象に関し調査研究を行っている。以下に2016年3月に作成した3ヶ年間(2013年、2014年、2015年)の結果を総括した報文を、順次公表しますので、ご覧下さい。今般はその第4報です。

＜第4報＞

＜報告書 知床調査＞

2016年 3月 13日

ルシャ川・テッパンベツ川 両河口域での

3カ年間(2013年、2014年、2015年)の熊 U.arctos に関する調査報告

調査者及び報告書著者

北海道野生動物研究所

所長 農学博士 獣医学修士 門崎 允昭

研究所 主幹 稗田 一俊

研究所 主幹 PETER NICHOLS

大瀬初三郎氏に聞いた、ポンベツ川、ルシャ川、テッパンベツ川、の魚類の遡上生息時期は下記の様であった。

サクラマス(数は少ないが)が、6月中旬～7月下旬に遡上生息している。

カラフトマスは(年により増減があるが)、8月上中旬～10月上旬に遡上生息している。

サケが9月中旬～12月上旬(僅少1月にも)、遡上生息している。

我々が調査した3ヶ年間でも、年により遡上時季と遡上魚の数量に目視でも明らかに変動が見られた。また、自然災害での河床の産卵床消失の影響も魚の遡上を阻害することも、当該地で、発生することも知った(次の知見)但し、年により、遡上時期と魚数に明らかに変動が見られた。例えば、調査時期③の2014年6月18日～21日(4日間)の際、テッパンベツ川では、魚類の遡上が全く無く、流水が白褐色化し、川底に粘土質土壌が沈殿し、産卵床が埋まっている事を知った。そこで、川伝いに検分に行った結果、凡そ2km上流地点の、右岸斜面が、2014年の多分春の融雪期だと思うが、目測だが、川面から高さおよそ200mの所からその下部の土砂が、立木と共に大崩落し、川を堰き止め、その土砂が下流に拡散し、川底に沈殿したことが原因と識った。2015年10月には(調査時期⑦の知見)、前年川底に沈殿していた土砂が、流失し、水も澄んでいたが、魚の遡上は全く見られなかった。そこで、大瀬初三郎さんに、そのことを話したところ、「稀にそのような事があるよ」との答えであった。

(この件に関する稗田の見解)

テッパンベツ川で魚がいなくなったことについてであるが、春先に、浮出前のサクラマスやカラフトマス、サケの仔魚が河床で育っているときに、崩落によって河床が泥で覆われれば、仔魚は窒息して死滅する。また、河床が泥になっていると、産卵期に魚は近づかなくなるので、姿を見ることが無くなるか、見られても極く僅かである。

管理道路に、排泄されていた熊の糞を見た結果、クルミ、ドングリ、シウリザクラ、ナナカマド、ヤマブドウ、コクワ、笹の葉を食した糞であった。これら樹の種実の多くは他所で食し、糞を当該地で排泄したものであった。鹿の骨に熊の歯痕の付いたものが、あった事から、鹿も食することが推察された。このように、多様な食資源が当該地には存在する。

②について、門崎は自身による 1970 年以降の多様な知見から、熊は人からの危害を嫌い避ける習性があると看取。特に「銃殺と言う人間の行為」を極度に恐れ、それから本能的に避けようとするとの見解を有する。門崎の 1978 年からの、斜里町役場での、聴き取り調査では、当該地で、銃器で熊を殺したのは、1978 年 1 頭、1979 年 3 頭、1980 年 2 頭、1981 年 3 頭、1982 年捕殺 0、1983 年 2 頭、そして、最後は 1989 年 8 月 26 日に、ルシャ河口部で、推定 15 歳の雄 1 頭(体重 232kg、体長 1.74m : 大瀬初三郎氏の教示)を銃殺したのが最後で、以来銃殺を行っていない。大瀬初三郎氏の話では、銃殺を止めて数年経た 1995 年頃から、人や車を熊があまり気にせず、番屋付近や道路に出て来るようになったと言う。要するに、熊は数年掛けて、この地域では銃器で殺されない事を学習し、それによって安心感を懐き、この地域を生活地として使用するようになったので有る。

③について、「眺望が利き、熊同士の遭遇を予防し得る」事。

熊、特に子を連れた母熊は、他の熊から子が襲われるのを恐れ、熊同士の遭遇を警戒するが、当該地の標高 20m 以下の平地帯は樹木が僅少で、殆どの地所は丈 1.3m 以下の草類で、熊にとって当該地一帯は全体的に眺望がよく効く場所で、1 歳未満の子熊以外は、四足歩行の状態でも鼻先を上げれば、眺望が利くし、熊はよく立ち上がって、目線を高くして眺望する特性があるので、当該地では、それによって、熊同士は遭遇を回避し得る利点がある。そのために、子を連れた母熊も安心して、当該地に出て来て、育子と子に生活の術を教授する場として活用している事が看取された。母子熊にとっての当該地は、見通しが効くので、他個体との遭遇が避け得、食料資源があり、斜面地には休息し得る場もあるので、子育ての好適地である。子熊を教育する適地でもある。鮭鱒が河川に遡上する時期は、高栄養の鮭鱒が採食し得、食料を索餌する苦労が無く、越冬の準備がし得る。

<調査時期と期間>

調査は、2013 年 10 月から 2015 年 10 月の間の、次の下記 7 期実施した。

<調査時期①>2013 年 10 月 2 日～5 日(4 日間)

<調査時期②>2013 年 11 月 13 日～17 日(5 日間)

<調査時期③>2014 年 6 月 18 日～21 日(4 日間)

<調査時期④>2014 年 9 月 25 日～28 日(4 日間)

<調査時期⑤>2014 年 11 月 2 日～5 日(4 日間)

<調査時期⑥>2015 年 6 月 12 日～15 日(4 日間)

<調査時期⑦>2015 年 10 月 24 日～27 日(4 日間)

<訂正> 会報 69 号で、ハンノキ *A.japonic* とあるのは、ケヤマハンノキ *A.hirsuta* の誤記です。植物学者の斉藤新一郎さんから、指摘されました。訂正させて戴きます。

(了)